

植松健郎先生を送る

その他のタイトル	Danksagung an Prof. Kenro Uematsu
著者	浜本 隆志
雑誌名	独逸文學
巻	47
ページ	1-3
発行年	2003-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018095

植松健郎先生を送る

浜 本 隆 志

関大からまた名物教授が去っていく。植松先生が古稀を迎えられたのはめでたいかぎりであるが、生まれた年の順とはいえ、またひとつの軌跡の区切りであっても、別れはやはりさみしい。わたしたちは、38年の長きにわたって関大のために尽力された植松先生に、こころから感謝の気持ちを込めて、この古稀記念号を贈呈したいと思う。

冒頭に「また」と書いたのは、3年前に退職された小川悟名誉教授を意識してのことである。この時代の先生方は、名物教授といわれるだけあって、いくつかの伝説やエピソードを残している。若き日の植松先生のトレードマークは、ベレー帽と唾えパイプであった。当時、フンボルト給費留学から帰ったばかりで、ダンディーな姿でさっそうと学内を歩いておられた。

植松先生は、あの学園紛争の最盛期に唯一任期を全うした学生部長として知る人ぞ知る。当時、学長をはじめとして、とりわけ最激職の学生部長は、任期なかばで次つぎとダウンをしていった。とくに試験シーズンになると、学生たちが決まり切ったようにバリケード封鎖をした。正門を封鎖した学生に対し、寒風のなかハンドマイクを手に長時間にわたり説得していた先生の光景が、いまだにありありと浮かんでくる。

リベラルな先生は、学生と対決するのではなく、やんちゃで理不尽な学生の要求にもじっと耳を傾けた。そして粘り強く対話をし、説得をするスタンスで、学生部長不倒最長記録を打ち立てた。いわば先生は学生のよき理解者であった。学生部長をしながら授業もやっていたので、きっと大変な苦勞をされていたのであろうが、弱音は一切聞いたことがない。われわれは外野席で、先生はどのような精神構造をしておられるのだらうとうわさをした。

植松先生は筋を通すことを身上としており、それは教授会の発言でも同様であった。納得できないことに対しては、たとえひとりになっても

堂々と発言し、自説を曲げず主張した。しかし決まったことに対しては、じつに淡々としており、決して蒸し返したり、愚痴をいったりしなかった。また語学教育や学科のカリキュラム改革でもつねに先進的であった。ドイツ語ドイツ文学科が文学部のなかで、新しい改革をおこなえたのも、先生に負うところが大きかったといえる。

かつて故上道先生を囲んで、関大出身のゲルマニストの集まりがあったとき、植松先生はいつも姿をあらわした。そして「黒いアヒルが一羽おります」という挨拶をした。先生は自然体で関大に溶け込み、出身者以上に関大人になり、関大をこころから愛していたことが言動から滲み出していた。したがって先生は労をいとわず、いろいろな学内の仕事に就かれ、誠実に職務をこなされた。また近年では、外国語教育研究機構創設にもたいへん尽力をされた。わたしたちはそのような先生の善意に甘えて、さらにこの関西大学独逸文学会の会長もお願いし、お引き受けいただいた。

植松先生の多方面にわたる研究については、業績目録が示すとおりであるが、とくに共著の『文学は何ができるか』、『性差と文化』などは、時代状況に対する敏感な発言をまとめられたものであり、先進的な思想を語っている。先生の研究スタンスは、時代を視野に入れ、なんのための研究かということを明らかにしている点に特長をもつ。

とりわけ先生が渾身を込めた、グラーフの訳書『ぼくらは囚人だ』は、568ページにもわたる労作であるが、これをわたしたちは出版記念会で祝った。先生の人徳のなすところで、そこには多数の人びとが集まった。あの日の先生は大きな仕事を終えたという満足感か、とてもうれしそうであった。几帳面な先生の性格は、会の終了後の丁寧な礼状にもあらわれている。

私事になるが、思い起こせば昭和44年に植松先生の「文学概論」の授業を聞いてから、もう34年の歳月が過ぎ去ってしまった。とくに昭和45年の卒業論文の指導教授は、植松先生と小川先生であった。当時は卒論ゼミはなく、学生が勝手に先生に相談しにいった。植松先生はわたしを家まで呼んでくださった。おいしいコーヒーを飲ませてあげようと言って、コーヒーミルをまわしながら、千里のマンションでカフェ論を聞かせていただいた。口頭試問では三人の先生方が面接をされた。もっぱら

植松健郎先生を送る

植松、小川両先生が質問し、長老の上道先生は奥に座って、じろっとあの鋭い眼光でわたしを見ていた。

若き日の印象はきわめて鮮明に残っているが、指導を受けた先生方は、植松先生を最後にもうすべて退職されてしまった。気がつけば自分が長老といわれる年にだんだん近づいてきた。植松先生は近年、「わたしはいい時に関大を辞めるわ」とおっしゃっていたが、今後、大学が激動の時代を迎えることを見越しての発言であろう。あとを受け継ぐわれわれの責任はますます重いといわざるをえない。

植松先生はこのたび関大を一旦退休されるわけであるが、今後のますますのご健勝をこころからお祈りするとともに、名誉教授としてわたしたち後進の指導を、衷心よりお願いするしだいである。これから先、斬新な先生のことであるので、さらなる次の人生の軌跡をきっとわたしたちに見せてくださることであろう。

2003年3月吉日